

	B	D	E	F	G
55	神武	B.C. 660年	AD 57年	B.C. 173年	
56	綏靖	B.C. 581年	98年	B.C. 132年	
57	安寧	B.C. 548年	114年	B.C. 116年	
58	懿德	B.C. 510年	134年	B.C. 96年	
59	孝昭	B.C. 475年	152年	B.C. 78年	B.C.57年新羅建国始祖カクキョセイ稲飯
60	孝安	B.C. 392年	194年	B.C. 36年	
61	孝靈	B.C. 290年	245年	AD 15年	
62	孝元	B.C. 213年	284年	54年	57年後漢光武帝より倭奴国金印をもらう。ヤマトヒメ。57年新羅昔脱解（開化天皇の妃：丹波竹野媛（たにわのたかのひめ、竹野比売） - 丹波大県主由基理の娘の第一皇子：彦湯産隅命（ひこゆむすみのみこと、比古由牟須美命）か？
63	開化	B.C. 156年	312年	82年	107年倭が生口を後漢に送る。アムルボコ（ヒコムスミの子か？）来る。
64	崇神	B.C. 97年	(156年)	(156年)	日子坐王（112年）。豊玉姫。
65	垂仁	B.C. 29年	190年	190年	トヨキヒメ。
66	景行	AD 71年	239年	239年	239年魏に朝貢。263蜀滅亡、265年魏滅亡。倭姫。
67	成務	131年	269年	269年	280年吳滅亡。武内宿禰。
68	仲哀	192年	299年	299年	
69	神功	201年	303年	303年	317年東晋建国。
70	応神	270年	337年	337年	
71	仁徳	313年	357年	357年	396年倭が支配していた百済を高句麗好太王が平定。
72	履中	400年	400年	400年	400年新羅を攻める倭を好太王が追う。407年好太王が百済を攻めて大勝した。
73	反正	412年	412年	412年	413年讃東晋に朝貢。
74	允恭	416年	416年	416年	420年東晋滅亡、宋建国。421,425,430年讃、430年,438年珍朝貢。443年済は宋より安東將軍詔勅。451年済安東代將軍。
75	安康	454年	454年	454年	
76	雄略	457年	457年	457年	462年興は安東將軍,478年武は安東大將軍。479年南齊建国。479年武は鎮東大將軍。
77	清寧	480年	480年	480年	482年富士山噴火。

## 「神武東征と卑弥呼 神武東征はあったか？」

土方水月

まず、神武天皇を初代とする即位年表を上に掲載する。この年表には天皇即位年を記したが、記紀のいう年(D列)と神武天皇の先祖を日向とする年(E列)とを対比させ、さらに神武天皇の先祖を出雲とする年(F列)とも対比させ示した。

この年代表に示すとおり記紀の年代(D列)は現実的ではない。

そして、神武天皇の先祖を日向とする年代(E列)は崇神天皇が最初の天皇であり、それ以前は欠史八代とし、事績はないことにしている。さらに存在すらしていないという人も多い。

しかし欠史八代の天皇は存在はしているはずである。欠史八代が存在しないと神武天皇が初代にはならないからである。そしてさらに10代目の崇神天皇も10代目にはならない。

神武天皇と崇神天皇がどちらもハツクニシロシメスメラミコトである。そのため、崇神天皇が初代という人がいるが、崇神天皇が初代なら神武天皇はいないことになる。

神武天皇の先祖を日向とする年代(E列)を信じる人も、神武天皇がいなかったという人はあまりいない。

しかし、E列を見ればわかるように、崇神天皇の即位年と先代の第9代開化天皇の即位年に整合性がない。

もしも整合性があるとするなら、開化天皇とその先代の第8代孝元天皇の即位年の整合性が取れないことに。E列での神武天皇の即位は57年である。そしてこれは固いらしい。

つまり、この年代を信じる人はその矛盾自体を認めていることになる。この年代表(E列)を信じる人は欠史八代はいなかったということに。もしその上で、「欠史八代はいた。」というなら、それは王朝交代があったということ認めていることになるのではないだろうか？

しかし、神武天皇の先祖を日向とする年代(E列)を信じる人にとっては、崇神天皇を初代としていないのには理由がある。神武東征をしたのは崇神天皇ではないということを認めているからである。神武東征を行ったのはやはり神武天皇と考えているらしい。

この場合の神武天皇は「サノミコト」。崇神天皇よりも先に最初の東征をした人であった。

彼は崇神天皇の先祖であり、兄はイツセノミコト。イツセノミコトはナガスネヒコとの戦いで、毒矢にあたって死んだ。今も和歌山に墓がある。

では、サノミコトとは？サノミコトという名はあまり知れていない。本名だからである。本名は敵に知られたくない。一般に知られる名はワカミケヌである。イツセ、イナイ、ミケイリヌの次の四男であった。

そして「神武東征」した神武天皇は、兄イツセが亡くなった後、紀伊半島を迂回し、やっとのことで畿内にたどり着くことができた。八咫鳥の援助によって。

しかしその話は神話として描かれ、史実でないという人も多い。とくに欠史八代がいけないという人にとっては信憑性のないものである。

一方、神武天皇の先祖を出雲とする年代(F列)を信じる人にとっては、崇神天皇は当然第10代天皇であり、第9代開化天皇の子である。この場合、実子とは限らない。養子であっても男系で繋がっていれば問題ない。

この系統は、ホアカリと出雲出身の后を祖とする神武天皇を初代とする。この場合の神武天皇は「アメノムラクモ」である。彼は海部王朝の祖ともいわれる。次代が磯城王朝とも呼ばれる三輪大神を祀る磯城のカムヌナカワ耳。彼らの母は出雲出身であった。飛鳥も纏向も三世紀になるまでは出雲族のクニであった。

彼らはホアカリを祖とするため、記紀ではその祖を神武天皇の祖であるニニギと兄弟のニギハヤヒにされてしまった。

年代表にもどると、神武天皇と崇神天皇がどちらもハツクニシロシメスメラミコトであるが、崇神天皇が初代という人がいるが、崇神天皇が初代なら神武天皇はいないことになる。それであれば、崇神東征となる。

しかし、神武天皇の先祖を日向とする年代(E列)を信じる人も、神武天皇がいなかったという人はあまりいない。E列を見ればわかるように、崇神天皇の即位年と先代の第9代開化天皇の即位年に整合性がない。

E列では神武天皇の即位は57年である。それが正しいとすれば、第10代崇神天皇と開化天皇との年代が合わないことになる。あるいはその先代の第8代孝元天皇の即位年の整合性が取れないことになる。

神武天皇の即位が57年であるとすると、そこで156年のずれが起こる。つまり、神武天皇の先祖を日向とする年代(E列)での神武天皇は「本当の神武天皇」ではない。それはそれを信じる彼らにとっては当然のことであるらしい。

ある方は280年以降といい、ある方は3世紀という。3世紀は卑弥呼のいた時代。倭国大乱によって共立されたにもかかわらず、3世紀の卑弥呼より後に神武東征があったという。

倭国大乱は2世紀といわれる。E列を信じる人でも神武東征は1世紀という。つまり、1世紀から2世紀に神武東征があったことと思われる。

つまり、ここまでの論点を整理すると3つの説に分けられることになる。

- 1 神武東征は神武天皇により行われたが、神武天皇は「アメノムラクモ」であった。
- 2 神武東征はあったが神武東征は1世紀に行われ、「神武天皇」によるものではなかった。
- 3 神武東征というものはあったが、それは崇神天皇によるものであった。そして、3世紀にそれは行われた。

どれが正しいかはともかく、2と3の説では神武東征は「神武天皇」によるものではないということになる。

ではそのときの「神武東征」はだれが行ったのか？

2の説での「神武天皇」はニギハヤヒを祖とする「ウマシマジ」であったとされる。伝承では彼の兄はイツセノミコトといわれる。イツセノミコトは実在する。そして四男が「サノミコト」といわれる。

3の説での「神武天皇」は「崇神天皇」と考えられているようである。しかし、宇佐と出雲の伝承では崇神天皇は九州に居た。東征したのは崇神天皇の後豊玉姫。支えたのは当時「皇太子」であった垂仁天皇であったが、これを「崇神東征」としている。豊玉姫は東征中、安芸の宮島である厳島神社でなくなった。いまでも厳島神社に祀られる。

つまり、「神武東征」は二回あったことになる。

一回目はニギハヤヒを祖とする「ウマシマジ」と「イツセノミコト」による東征。1世紀に行われた。

二回目は崇神天皇の後豊玉姫と垂仁天皇による東征。2～3世紀に行われた。

そしてさらにいえば、4世紀には神功皇后とその夫ともいわれる武内宿禰との東征があった。

そして、一回目の東征は、E列の神武天皇即位は1世紀で、F列のウマシマジ東征も1世紀といわれる。

また、二回目の東征は倭国大乱の2世紀にあった。また、「卑弥呼」死後の乱が3世紀後半にあり、その後台与が共立された。

これらは、出雲や豊やその他の伝承を整理したものであり、史実ではないが、書物に書かれていることが正しいとは限らないことは偽書と言われるものが多々あることから周知のとおりである。

これらのことが、考古学的にも裏付けられれば真偽はおのずとわかってくるものと思われる。

また、3世紀の遺跡といわれる纏向遺跡は垂仁天皇による二回目の東征の結果と考えるが、一回目の東征のウマシマジも纏向に居たとみられる。

さらに、一回目の東征は太平洋沿岸を東征し、四国の土佐、阿波、淡路(阿波道)を経て近畿に渡るルートで、ナガスネヒコとの戦いまでは主だった戦いはなかった。そして2回目の東征は、豊玉姫が安芸にるように瀬戸内海を通るルートであった。また、陸路でも東征し、出雲を通るルートでもあった。

ここで注意がいるのは、吉備である。1回目のウマシマジ東征により畿内から逃れたのはナガスネヒコだけではなく、孝霊天皇も吉備へ逃れた。そして、元は同族でもある出雲を攻めた。そこに丹波のタジマモリの参戦もあり、出雲は滅亡したといわれる。1世紀のことである。

そしてこのときに孝霊天皇の陵墓は別にあるが、その御魂を子孫である吉備津彦らが祀ったのが岡山の楯築遺跡(楯築古墳)であるともいわれる。

これらの伝承による考察は、年代的にも考古学的にも矛盾しないのではないと思われる。

そして、邪馬台国は畿内ではなく、九州にあったと思われる。魏志の記述通りに考えればやはり九州以外にはないが、クナ国を熊本菊池周辺と考えれば、それよりは北にあったことになる。その場合、有明海沿岸周辺、高良大社周辺も考えられるが、それはもっと昔で、久留米周辺のどこかであると考え。拙書「卑弥呼と邪馬台国の真実」には「朝倉」としたが、その後、「朝倉」はもう少し新しいのではないかと考えている。

また、「卑弥呼」は九州にはいなかったと考える。「卑弥呼」は「ヒメと呼ぶ」の意味と考える。魏志の元になるものを書いた者は「卑弥呼」には会っていない。そして、「卑弥呼」自身は朝貢していない。朝貢した倭人は王を「ヒメ」と呼んだ。それを「卑弥呼」と記載したものと考える。

さらに、魏志は「台与」を安芸の宮島で亡くなった崇神天皇の後豊玉姫と「豊トヨ」としたと思われる。その結果、「卑弥呼」は豊玉姫よりも前の人物となる。それが誰かは諸説あるが、「太陽を祀る巫女」であればそれは「畿内」か「出雲」でしかない。

つまり、「クナ国」も九州にはあったが、「クナト国」は出雲であり、ナガスネヒコが逃れた古志でもあり、磯城の三輪山周辺でもあった。三輪山の麓には「太陽を祀る巫女」「卑弥呼」は今もいる。

「邪馬台国」と「クナ国」は九州にあったが、「女王国」と「卑弥呼」は畿内に居たと考えられる。

そしてそれらの話が魏志では一体になったものと思われる。